

リサーチ



H.13.2.20

No.19

ご苦労様でした

今年の研修にかかわる研究授業とその授業研究が一通り終わりました。

どの学年の提案もそれぞれに考え抜かれ、吟味されたもので、参観した私たちにさまざまな問題提起と多くの示唆を与えていただいたこと、感謝いたします。

ありがとうございました。これから研究集録にまとめていく作業に取りかかることになると思いますが、よろしく願いいたします。

「研究」ですから、『わからない』『未だ不明』『あいまいさを残している』ということが前提にあって、それらを解きほぐすこと、一歩でも解明に近づくことが命題になると思っています。わかっているのなら研究の余地などないからです。

その解明の手がかりは何か、たとえば、それは「教師の働きかけ」と「子どもの変容の姿」の間に見いだせる「関連の強さの違い」がそれにあたるでしょう。

活動の中で、望ましい姿で学習に取り組んでいる子がいたとして、『あの子は、とてもよく学習に取り組んでいた。』と判断し安心するだけでは、研究的に意味のある事柄は何も見えてこないだろうと思っています。

何がその子を学習に駆り立てたのか、それは教師のどんな働きかけによるのか、あるいは学習内容そのものが大きな要因となっているのか、それともその他の外的な要因によるのか、といったことを検討し考察することが解明への手がかりになるのです。

『あの子には能力があるからだ』とか『もともとまじめな性質だから』とその子の能力や資質のせいにして判断してしまうだけでは、授業づくりに役立つような意味のあることは何も見えてこないでしょう。

たとえ能力が低くても、あるいはたとえ意志や意欲が低くても、ある学習環境に置かれることで『学ぶことは楽しいし意味のあることだ』『やれるかも知れない』『やってみようか』と内発的な意欲が生まれ、その意欲を發揮して前向きに努力を惜しまずがんばってしまうのが人間ですから、そうなれるような働きかけのポイントは何か、を実際の子どもの姿を通してつかむことが研究のなかみそのものだと思っています。逆に言えば、意欲が見えない、望むような取り組みが見られないのは学習環境の何に問題があるのか、といったことについて子細に検討しその要因を排除すれば、意欲を持つことに役立つような前向きに取り組んでみようとする心の動きを生み出せるような学習環境づくりの手がかりを

得ることに一步近づけるでしょうから、そこが研究のポイントになると思っています。

ですから、単に（授業が）『うまくいった』とか『失敗した』といった次元での反省ではなく、何が（よくも悪くも）子どもに大きな影響をもたらしたかについて反省・吟味することが肝要だと思うのです。それができてこそ、次に役立つ研究となるはずです。

これから研究のまとめに入りますが、ぜひその視点で実践を振り返り、確かな手がかりとなるような集録としての足跡を残したいと思うのですが、いかがでしょうか。

ところで、（本当は「閑話休題」と書きたいところですが）先ほど「学習環境」と書きました。7～8年前に某大学の研究集録に掲載する論文を書いたときに、私の意図し思い描く概念をうまく表す言葉が見つからないままこのことばを使ったのですが、未だにこれ以上の言葉が見つからずにいます。この言葉で言おうとしているのは、いわゆる教室環境のことではありません。

それは、題材や単元の内容・学習に供される資料・教師の発問や投げかけ・接し方や言葉のニュアンス・教室の配置・グループの構成員・・・等々、その子とその子の学習を取り巻くありとあらゆる人的・物的・質的環境を包含したものとしてイメージしています。

私たちが30数人の子どもたちを対象に「一斉」に指導することを想定すると、人も内容も教室環境も同じなのだから学習環境もどの子にも平等に仕組んでいる、と思いがちです。

でも、同じ先生が同じ授業の中で、ある子の質問には懇切丁寧に応え、他のある子には冷ややかな応えしかしなかったとすれば、同じように仕組まれた授業であるにもかかわらず二人の子ども学習環境はまったく違ったものになってしまうはずで

あるいは同じ言葉を使ったにしても、ある子にはにこやかに、別の子には無表情に対応したとすればそれも違った学習環境を提供することになるはずで

例に挙げたのは先生のことばや表情ですが、そう考えてみるとそれ以外にわんさとある学習環境の諸条件の整備は、「教える」こと以上に大切であることがわかります。

なぜなら、学習環境が変わるだけで「やる気」になれたり、問い続ける上での自己コントロールができたり、それによってある成果にたどりついたりしてしまうという経験を私たちはイヤというほどしているはずだからです。

端的に言えば「学習環境が内発的動機（内発的な意欲＝やる気）を生む」ということに集約できると思っていますが、そのためには『どういう単元名（テーマ）にするか』『どういう課題を提示したり選択したりできるようにするか』『発問や投げかけをどうするか』などのことについて十分に吟味・検討することがまずもって大切でしょう。

なぜなら学習環境の最も大切な要因は、学習対象との新鮮な出会いだからです。

その出会いの新鮮さのなかみは、感動・驚き・意外さ・自己とのずれ・身近さなどであると言えますが、それによって知的好奇心が刺激され、「やる気」や「やれる気」がむくむくとわき起こるのではないかと考えていますが、私たち自身が子どもの頃にどういう出会いでそうなれたか、について思い起こしてみることは決して意味のないことではないでしょう。子どもの目の高さに立つ瑞々しい新鮮な感性を持った先生が求められる所以なのではないでしょうか。